

ライフ
ストーリー

池内 純さん

(2021年3月人間福祉学部卒業)

つながりを大切に生きていきたい

1. はじめに

こんにちは。私は 2021 年 3 月に関西学院大学人間福祉学部社会福祉学科を卒業し、現在社会人二年目です。就労移行支援事業所という福祉の通所施設で支援スタッフを行う傍ら、小中学校の先生や生徒などを対象に性の多様性などを伝える講演活動を行っています。

自宅でヘビを飼っている以外は、ゲームが好きなごく普通の人間です。

私はセクシュアルマイノリティだけでなく、発達障害の傾向を持っていると思っています。今思えば、セクシュアリティの話より、ASD¹傾向が根本にあるゆえのハレーションを起こしているのではないかとも思っている部分がありますが、それも加味して読んでいただけると幸いです。

2. セクシュアリティについて

現在、X ジェンダーとアセクシャルを自認しております。身体的な性別は女性で、ホルモン治療や性転換手術は行っていません。私の X ジェンダーの性別感についてもう少し明確に言うと、「女性ではないが、男性になりたいわけではない」という性自認です。性的指向は、現状、誰に対しても恋愛感情や性的欲求を抱くことはありません。

自分の自認について時系列に沿って思い出していこうと思います。小学校時代は特に性別などに囚われることなく過ごしていました。私の学年があまり男女の境が無かったのかもしれませんが。男の子とも女の子とも遊んでいたイメージがあります。大人びた女の子達に「クラスの誰が好き？」という会話を合宿で持ち掛けられましたが、その時は適当な男の子を伝えていました。

中学校受験をし、中学校と高校は私立の女子校で過ごしました。自分の性別に違和感を覚え始めたのはちょうど中学の頃と思います。まず、中学に入ってまず衝撃的だったことが、休み時間に誰も校庭に遊びに行

¹ 自閉スペクトラム症。言葉や言葉以外の方法（たとえば、表情、視線、身振りなど）から相手の考えていることを読み取ったり、自分の考えを伝えたりすることが不得手で、特定のことに強い興味や関心を持っていたり、こだわり行動があるといった特性。

かないことでした。休み時間や放課後はドッチボールをするなど、教室の外に出ることが私にとっての当たり前であったため、ずっと教室内で話合っている生徒たちが不思議でした。あと、誰もゲームをしないことが印象的で、会話の話題に困りました。

私のいた中学校だけかもしれませんが、教室内ではみんな会話するグループを持っていました。他のグループのメンバーと話すと、所属しているグループからハブられ、いじめられ、でも「どこかのグループに所属しないと社会的に死ぬ」という無言の圧力がありました。私は当時その仕組みや雰囲気疑問を感じ、しかし女子同士の集まりってそういうものなのか・・・と曖昧に納得、それに従ってグループに所属して過ごしていました。

そんな学校生活を送っていくうちに漠然と「私は女子ではないんだ」と考えるようになりました。女子ならばグループを作りたいという思考を持つはず。その考えが根本からない自分は女子ではない。今思えば、たまたまその中学校という狭い社会に集まった生徒たちの考えが、自分とは違っただけですが、当時はその社会が自分の全てで、順応以外の道は見出せませんでした。

高校になると、「グループを作らなければならない」という無言の圧力が少し薄れていきました。一人で昼ごはんを食べていると、陰口が聞こえるくらいで、どこのグループにも所属していない人は何人かいました。そんな人たちが、昼ごはんやグループワークの時のみ協力しあう「ボッチ同盟」がいつの間にか形成されました。それでも人と違う部分を噂にされると取り返しのつかないことになる、強い生徒たちに同調する以外の選択肢がない、と緊張が高い状態は続いていました。

そんな時、小学校時代の友達からの誘いでオンラインゲームにハマりました。その友達の兄のグループに招待され、深夜はずっと通話を繋ぎながらゲームをしていました。ゲーム友達がみんな大学生で時間があつたこともあり、私は朝までゲームをして、昼は高校に出席のみして授業中は寝るという生活が続きました。ゲームをするグループはみんな男性でした。趣味が合い、話や価値観が合い、素直に楽しいこのグループが自分の

居場所になっていました。そこで「自分は男なのかもしれない」と思うようになりました。当時、性同一性障害という名前はテレビか何かで知っていたのですが、自分の身体を男性に変えたいとは思っていませんでした。それに女子校で男性を自認することは漠然と良くないのではないかと考え、誰にも言わずにいました。

また、高校の「ボッチ同盟」の一人に誘われ、年齢確認のされない怪しいクラブに行ったことがあり、そこで初めてセクシュアルマイノリティの人たちを目の前で見ました。その人たちとは会話をすることもなく、特に悪い印象は無かったのですが、「セクシュアルマイノリティはアンダーグラウンドな世界でしか見たことが無い」というイメージが無意識のうちに構築されたような気がします。

ちなみに、高校は一回行かなくなれば、一生行けなくなるという考えを持っていたので、ほぼ無遅刻無欠席で、成績はとても悪かったです。

X ジェンダーという言葉を知ったのは大学に入ってからでした。SNSでジェンダーレスなファッションを見ていたことから X ジェンダーという言葉があることを知り、セクシュアルマイノリティについて調べるようになりました。大学の、人と人との接点が薄く、一人でいても何も言われぬ環境が心地よく、安心して自分のことに目を向けられるようになったのかもしれない。関西学院大学の LGBT サークルである cassis に大学 2 年生から入り、X ジェンダーという言葉が頻繁に使われていることを知りました。

人間福祉学部にいたこともあり、「人とは違う、自分の意見を発信してもいい」「むしろそれを発信することで社会の誰かの助けになる」ということを学ぶことが出来ました。大学在学中に様々な講演活動やセクシュアルマイノリティに関するイベントのボランティアに参加し、現在も続けています。また、福祉の「個別化」という原則を知ったことで、福祉の知識がある人にはカミングアウトしても大丈夫であると思うようになりました。セクシュアリティを含め、障害や特性にあてはめず、一人の人として「そういう人もいるんだな」と思ってくれることがありがたかったです。

大学に入ってから初めて安心して自己表現できる環境を得ることが出

来、一つのアイデンティティとして、理解して肯定することが出来るようになったと思います。セクシュアルマイノリティとのつながりもたくさんでき、今でも連絡を取り合っています。あまり自分に干渉しすぎず、視野を広げてくれた大学の環境に感謝です。

3. カミングアウトについて

私はあまり周囲にカミングアウトをしている方ではないと思います。理由としては、周りへの影響と、自分の保守に鑑みた上で、わざわざカミングアウトする必要性を感じないからという気持ちになるからです。「相手が困るのではないか」「相手が勝手に広めてしまうのではないか」「カミングアウトすることによって過度に配慮されてしまったらめんどくさい」「マイノリティが本当か勝手に評価されるのではないか」など、カミングアウトする上での不安は、たくさんあります。

私は通称名を用いて生活しています。大学で、通称名を使用できることは2年生の時に知りましたが、結局最後まで申請しませんでした。それも、資格取得のために単位や実習先の調整をしてもらっている時であったので、今通称名に変更すると手続きがややこしくなるのではないかとこの大学への配慮からでした。相手のことを考えすぎて挑戦できないよりは、多少問題が起こっても話し合うことが大切なのではないかと今は思います。

通称名以外は特に配慮を求めています。カミングアウトするときも、通称名を使うことが出来るかどうか相談する時がほとんどです。もちろん、「カミングアウト」＝「配慮を求める」だけではないことは分かっているのですが、カミングアウトした後の「で？どうしたいの？」に警戒しているのではないかと思います。

普段行っている講演活動で私は、カミングアウトの理由について、「ただ、そのことを知っておいて欲しい。一緒に悩んで欲しい」という意図がある可能性があるので、決定や結論を焦らないようにと伝えていきます。相手が気にかけてくれていることは嬉しいのですが、どうしたいかは、私含め当事者が一番自問自答しているのではないかと思うからです。

そして、私の場合、自問自答した末に、「なぜ当事者だけに説明責務があるのだろう」と考えてしまいます。シスの方々は自分の性自認や性的指向を言っていないのに、なぜ自分だけ言わなければならないのだ、と最近ばかりは開き直ってカミングアウトを避けています。現状は、私自身がカミングアウトをすることがゴールではなく、他の当事者がカミングアウトしたいと思ったときに、カミングアウトできる社会になればいいなと思います。

また、X ジェンダー、アセクシュアルの自認もカミングアウトのしづらさを強化していると感じます。私の性自認は男でも女でもない性別です。恋愛感情はありません。となると、無いモノの証明は難しく感じます。

私の説明が不得意という性格は一旦置いておいて、今の社会は男女二元論で、結婚することが当たり前です。「最近、LGBT という言葉が流行っている」という言葉が出てくるくらいには、トランスジェンダーや同性愛者は身近になっているのではないかと思います。しかし、無性や第三の性、無性愛はそもそもの認知度が低く、言ってもすぐ納得されることはあまりありません。また、X ジェンダーを説明しようにも人によって定義が異なるので、結局「その人に聞いてください」という説明になってしまいます。恋愛の話を持ち掛けられた時、恋愛感情がないと伝えると「まだいい人と出会っていないだけだ」と言われることがよくあります。「恋愛感情が無いなんて損している」と言われたこともあります。経験不足と先天性の違いなどを含めて、どう返答すればいいのかは今も悩み中です。

結局、考えには偏りがあり、カミングアウトをしない理由を探しているのは自分であるなと理解しています。ただ、カミングアウトして良かった経験が少ないなど、記述していて思ったので、カミングアウトに慎重になっているのかもしれないなと思います。

4. 家族へのカミングアウト

私の家族とは仲が悪いわけではないですが、セクシュアルマイノリティに理解があるとは言えません。私がカミングアウトしている今でさえ、テレビを見てよく「あの人がネエっぽいなね」などと発言していますし、私のことは何度説明してもトランスジェンダーだと思っています。

一番古い記憶で、私が高校の頃、性同一性障害かと悩んでいた際に、カミングアウトするつもりはなく、何かの話の流れで「私が性転換手術したらどうするか？」という質問を投げかけてみたことがあります。すると、母は「自分の許容範囲外だから家を出て行ってからやって」と言われました。なぜか記憶に残っているので、私の中では衝撃的なことだったのだと思います。

それでも家族にカミングアウトするきっかけとなったのが、新型コロナウイルスの影響でした。世界中がパニックになっていた時、私は丁度大学3年生の終わりから4年生になる時でした。オンラインでの授業が主になり、家族も実家でリモートワークをすることが増えました。LGBT関連の行事も例外なくリモートで行われることが多くなり、学校やどこかのカフェにて対面で話していた内容が全て通話になりました。そうになると、おのずと性自認や性的指向の話を実家でしなければなりません。その時初めて、自分がXジェンダーであること、男が女がと話をしているかもしれないが気にしないで欲しいと伝えました。そして、結婚して子どもが出来る可能性は低いことも伝えました。その時の反応としては、「そうかもね。普通の女の子とは確かに違うもんね」など、否定的な様子はなく、了承されました。

カミングアウトしてみて、嫌な言い方をされることもありました。「私の育て方が悪かったの？」「男の子なんだよね」「この持ち物は男っぽい、女っぽい」などを言われ、喧嘩したこともあります。今も私の説明を家族は自分の価値観の範疇で解釈して勝手に納得している様子です。ただ、大学を卒業後、社会人となってから通称名を使うことを事後報告として親に伝え、その時は申し訳ない気持ちが私の中でもありました。親としても納得していない部分はあるようですが、一人暮らしをして、程よく距離を取りながら生活していこうと思います。

5. 就職活動、職場へのカミングアウト

セクシュアルマイノリティとして生活していて、一番困難を感じたことは就職活動だと思います。私は新卒で入社してから、一度転職をしているので、二度就職活動を行いました。しかし、セクシュアルマイノリティであ

ることをオープンにするかクローズにするか、通称名を使いたい旨をいつ伝えるかなどは最後まで迷いました。結果的には、新卒の際も、転職の際も内定が決まってから通称名を使いたい旨を伝えました。

まず、新卒の際はスーツがそもそも苦手でした。レディーススーツもメンズスーツもどちらも嫌で、一度会社の見学に行かせていただいた帰りに泣いて帰ったことがあります。履歴書や面接練習では、情報の開示範囲に悩みました。最初はセクシュアルマイノリティであることをオープンにして就職活動をしようと思っていました。大学時代に行っていた LGBT の講演活動やボランティア活動を面接にて話したいと思ったからです。しかし、初めて会う企業見学先の担当者さんや面接官がセクシュアルマイノリティに友好的かは分かりません。否定されるような発言はありませんでしたが、伝えると驚かれたり、身構えられたりする反応が少しずつ辛くなっていきました。通称名を使いたい旨を伝えると全ての企業で「前例が無いので、確認しなければ分からない」と言われました。旧姓を使う人や、外国ルーツで通称名を使っている人の話を大学でよく聞いていたので、前例がないと言われることが疑問でした。

配慮事項を伝えると選考に不利になるのではないかという懸念がありました。カミングアウトすることによって企業側に「めんどくさい人」と思われてしまうと受け入れられないように今でも思います。結果、一社目ではカミングアウトせずに内定をいただき、電話にてカミングアウトと通称名のことを伝えました。二社目はセクシュアルマイノリティであることや今までの活動を伝えた上で内定をいただきました。通称名のことは内定を受諾した電話にて伝えました。

現在は、職場である事業所のスタッフにはカミングアウトをして、セクシュアルマイノリティの活動を行っていることも知ってもらっています。

6. カミングアウトして良かったこと

私の周りには、カミングアウトする前とした後でも変わらずに接してくださっている人が多く、とてもありがたく感じております。セクシュアルマイノリティとしてや、X ジェンダーとして見ずに、「私」という一人の人間として

認識して会話をしてもらえると、性別を意識せずにいられることが何より楽に感じます。

また、通称名の使用に関しても、使っていていいと言われた時は嬉しかったです。深く理由を聞くことなく通称名で呼んでくれた中高の友人や、多様性に肯定的なメッセージを伝えてくれた大学の先生方、友人に感謝しています。私からも肯定的なメッセージを発信したいという思いが今も行っている講演などの活動に繋がっていると思います。

7. 最後に

今回、自分のライフストーリーをまとめてみて、自分の周りには肯定的なメッセージを送ってくれる人や場所が数多くあることが分かりました。

これだけたくさんの人とつながりを持つことが出来ているのは私がセクシュアルマイノリティだったからこそだと思っています。一筋縄では生きていけない社会でも、様々な人と相談しあって、共感しあって乗り越えていきたいです。